子育てかわら版 第１１

園長だより１１２号復刻

過去の園長だよりです

平成１８年７月１４日発行

育てなおし（代弁）

何度注意してもちょっと時間が経つとまたすぐ同じことをする子がいます。言って聞かせるとやってはいけないことだと分かっています。分かっているのだから、もうしないかと思うとまた同じ事をします。そしてこんな状態が結構長く続きます。これが他人を叩いたり、けったりするような場合には、大勢の人を巻き込んで問題になります。

原因は何か？二つの面があると思います。一つは順調な発達をしている場合です。幼児は何度も同じようなことをして試行錯誤の中から条件が少し変ったらどうなるのだろうと、因果関係を確かめます。大人からは同じことのように見えても幼児は少しずつの違いを確かめています。まるで科学者が未知の分野を実験によって確かめているのと同じ様です。そして十分納得したらもうやらなくなります。その課題を卒業したのです。

もう一つの原因は親から子へいつも一方的に言われ続けている場合、すなわち子供の言い分を聞く耳を持たず、親の要求だけを一方的に押し付けている場合です。一方的な指示命令の反動と考えられます。コミュニケーションというのは交互通行です。親の言い分ばかり聞かされても子供にも言い分があります。子供の言い分が間違っていることもあるでしょう。そのときに正しいことを教えるチャンスになるはずです。自分の言い分を言うチャンスを与えられなければ、親から怒られたときに、自分の主張をするより、その場をどうやってやり過ごすかを学習してしまいます。ですから、嵐が過ぎ去るまでじっとしているだけで、親の言っていることを何も聞いていないのです。そして『ごめんなさい』と謝りさえすれば嵐は過ぎ去ることをパターン化して覚えてしまいます。親は謝ったのだから、分かったと思ってしまいますが、子供は分かったのではなく怒られる事に終止符を打っただけなのです。分かっていないから何度でも同じことをして何度も怒られます。

その年令でやるべき課題は正しい発達ですが、それまでの発達課題の中でやりのこして来ると問題行動を起こします。その場合は何歳の発達課題をやり残しているか見極め、その時点に戻って育て直しをすることが解決策になります。

この場合、1歳から2歳半の言葉によるコミュニケーションの獲得の発達課題に戻ることだと思います。この年令は、親の言っていることは理解できるようになったものの自分の意思を言葉に表すことは出来ません。ですから親が子供の心を汲み取って、子供の言い分を代弁してあげることで、自分の気持ちが伝わる喜びを知ります。親にとっては結構面倒なことです。自分が理解したレベルでことを進めてしまう方が簡単ですが、「○○したいのね」と一旦子供に降ろしてあげることが大事なのです。この発達課題をクリヤしていなければ、4歳になっても5歳にもなって1・2歳の発達課題に戻ってあげなければなりません。ここを卒業しなければ次の発達課題に進めないからです。代弁してあげることによって、こういう場合（気持ちのとき）はこういう言葉を使うんだと覚えていきます。

3歳からは友達作りが始まりますが、それには言葉によるコミュニケーションが必要です。

また、集団の中で、自分の意思が通らないときパニックを起こしてしまう子がいます。どうしたのか、何をしたいのかをうまく伝えられずに、最後の手段としてかんしゃくを起こして、問題を解決しようとします。このような子も、同じ発達課題を卒業していないと思われます。